

与謝野鉄幹と漢詩

——『滿蒙遊記』付「滿蒙遊草」の漢詩

(二) —

西村 富美子

かつて筆者は前稿(本誌第十二号)において、寛の「滿蒙遊草」の漢詩について述べたことがあり、すでに「滿蒙遊草」の内容の概略を紹介しておいた。その後五年ほどの歳月が経過した間に「滿蒙遊草」に関する新しい資料が出現して、当時は不明な謎であったことが少し解明された所があり、今回はその新資料の紹介とともに、「滿蒙遊記」成立の過程について述べておきたいと思うに至った。

その新資料というのは、旧与謝野光家蔵(現堺市博物館蔵)、及び古澤幸吉家蔵の二つの資料である。前者は与謝野寛・晶子の長男、光氏家で所蔵されていたもの、後者は前稿で、寛・晶子夫妻の滿蒙旅行を実現させた人物として紹介した南滿洲鉄道公所長の古澤幸吉家から刊行された『古澤幸吉自叙伝「吾家の記録」』に収録の書翰及び漢詩稿等である。

今少し詳細にこの両者の新資料について述べておくならば、前者は、寛自筆の「滿蒙遊草」の初稿に、寛の漢詩の師吉田学軒が添削校閲を施したものであり、かなり厳密微細な朱筆の跡が見られ、版後の「滿蒙遊草」と照合すれば、寛はほとんど忠実にその指摘に従っている。

この自筆の詩稿の初めには「滿蒙遊草」のタイトルがある。ただし寛の「滿蒙遊草」の詩稿の制作、また吉田学軒の添削校閲、の時期についてその正確な時期は不明である。与謝野夫妻が滿蒙旅行から帰国した昭和三年(1928)六月中旬以降から、『滿蒙遊記』が出版された昭和

与謝野鉄幹と漢詩

五年(1930)五月までの二年ほどの期間としか残念ながら確認することができない。後者は、古澤幸吉氏の遺族、正確には孫に当たる陽子氏が主として編集されたもので、編者のあとがきによれば完成に「三年ほどの月日」を費やしたとの言があり、かなり完成までに相当苦心された由である。この「吾家の記録」に収録されている寛の書翰と寛自筆の四枚(五首)の漢詩(半紙)である。この四枚の漢詩は書翰の日付等からはほぼ日時を推定することが可能である。

前者は「滿蒙遊草」の全ての漢詩稿を収めるが、後者は四枚の半紙、詩は五首で、それぞれの紙葉の末尾に

一「古澤先生大政 寛 伏乞」

二「博古澤先生一燦併乞高批 寛 未定稿」

三「謹乞 古澤先生大政 寛 未定稿」

四「博古澤先生一燦併乞大政 寛 未定稿」

と、一を除いては、寛の「未定稿」の文字があり、古澤氏の「大政(高批・大斧)を乞う」ている。

また前者は、「滿蒙遊草」だけでなく、寛の他の漢詩も収めているが、添削校閲の程度は「滿蒙遊草」が最も緻密で、添削校閲に何度も修正を重ねている。今回の稿では、古澤家の資料(寛の漢詩四枚)を優先して言及し、前者の他の漢詩についてはまた別に稿を改めることにしたい。

与謝野鉄幹と漢詩

古澤幸吉については、前稿(一)の執筆の折は、古澤氏に関する資料は『満蒙遊記』、また少量の他の情報資料によるしか無く、『満蒙遊記』が古澤氏についてのほとんど唯一の資料であったため、今回の古澤家出版の『吾家の記録』は極めて貴重であると言わねばならない。その内容から、古澤氏はかなりの漢詩漢文の制作者であったことが知られるのだが今回知りえた古澤氏のその他の漢詩の実作については別の機会とし、この稿では古澤幸吉に宛てた寛自筆の漢詩、四枚のみにとどめる。

なお古澤氏に関する情報について、『吾家の記録』によって得た所が甚だ大であった。前稿(一)でも、全行程の案内役を務めた加藤郁哉氏、東京から与謝野夫妻に少し後れて訪中し、内蒙古への旅を共にした佐藤惣之介氏、氏は詩人俳人でもある。この両人は「洮南に赴く車上にて作る」の詩に「兩友」また「兩詩友」と記された人。そしてその一枚に「古澤幸吉先生の大政を乞う」と寛が記している古澤幸吉氏、併せてこれらの三人について簡略ではあるがすでに紹介をしておいた。古澤氏は前兩者と異なり主として哈爾濱での交流である。「哈爾濱での五日」を満鉄会館で滞在し、古澤氏の自宅での会合では「古澤先生が俳句と漢詩を」、また暇を求めては羲之の古法帖に筆を染められる」と、記していることも紹介しておいた。東京外国語学校(現東京外大)のロシア語科出身、卒後ロシアに外交官として、次いで満鉄公所長兼在留日本人会会長の重職を歴任し、退官後は哈爾濱に在住した人である。漢詩や俳句の作者でもあるがその作品はほとんど知られていない。「大政を乞う」というのは古澤氏添削の跡の実蹟が存在しない即ち寛の依頼に対する返信の事実が確認できないので、筆者には古澤氏の漢詩に関する情報について些少疑問の点があったが、『吾家の記録』はその疑問を見事に解消してくれた。なお寛と古澤氏はほぼ同年の生まれである。

与謝野寛 明治六年(1873)〜昭和十年(1935)、六二歳

古澤幸吉 明治五年(1872)〜昭和二十六年(1951)、七九歳
寛は太平洋戦争以前に死去、『満蒙遊記』刊行の五年後である。古澤氏は終戦後に死去し、兩者の没年には一七年の差がある。

寛が『満蒙遊草』の漢詩の添削を依頼したのは、昭和三年(1928)後半〜昭和四年(1929)ごろであろうか。与謝野夫妻が満蒙旅行から帰国したのは昭和三年(1928)六月中旬、『満蒙遊記』の刊行は昭和五年(1930)五月である。

古澤氏と寛夫妻の交流は古澤氏の長女松江が晶子の関係していた文化学院に入学して以来のことだが、当初寛は古澤氏とは未知の間柄であり、満蒙旅行以後から交流が始まっている。寛との交流の跡をたどれば、

大正十五年(1926)六月 書翰(晶子)

* 昭和三年(1928) 八月一七日 書翰(寛) 一①②、二③、四⑤

* 八月一九日 書翰(寛) ?

* 九月二五日 書翰(寛) 三④?

* 昭和四年(1929) 八月三〇日 書翰(寛) ?

※昭和五年(1930) 七月一〇日 書翰(寛)

九月一二日 書翰(寛)

昭和九年(1934) 一月一〇日 葉書・賀状(晶子・寛)

このうち、

昭和三年(1928)八月一七日付、及び同年八月一九日付、の二通の書翰に、寛の古澤氏宛ての「大政を乞う」漢詩三枚が同封され、昭和四年(1929)ごろの書翰に、漢詩一枚が同封されていたようである。当時、寛は軽井沢、古澤氏は哈爾濱在住(昭和四年(1929)七月には神奈川県厚木町)であった。

ただ最大の疑問は、吉田学軒の「満蒙遊草」全漢詩稿の最終の添削校閲と、古澤氏宛の四枚の「大政を乞う」漢詩との相互関係はどうなのか、ということである。即ち兩者の時期の前後、また古澤氏への

「大政」依頼の理由、の二点である。吉田学軒は寛の漢詩の師であり添削校閲を受けるのは当然のことであるが、古澤氏は漢詩の専家ではなく趣味教養の漢詩作家であった。ただ「吾家の記録」の年譜によれば、昭和五年(3880)(五八歳)のころに、「漢詩に目覚め、上村亮劍主宰の声教社同人」になったという。寛の古澤氏への漢詩点検依頼の後、与謝野夫妻から刊行された『満蒙遊記』の贈呈を受けたところである。何か思うところ触発されたところがあったのかも知れない。「吾家の記録」には先に述べたように、漢文漢詩が随処に点在する。

かつて哈爾濱で、漢詩を作りあった詩友ということが「大政を乞う」た理由であり、だとすれば当時の自らを知る古澤氏が「大政」を行わなかったのも頷けるのでは、との推測が許されるのではないだろうか。

○ 寛が古澤幸吉氏宛に書翰に添えて出した四枚の漢詩稿(料紙は半紙)について、紹介を兼ねて解説をしながら述べていくに当たって、原物の画像を添える代わりにまず最初に原型のままのレイアウト版を載せることにしたい。

一① 宿千山大安寺 用朱子月下述懷韻

清徹上峰氣、不許客衣單、童子
晚吹火、煙颺松樹間、自笑平生
語、漫然誇素寒、願求詩

骨瘦、飲水住千山、

② 赴洮南車上作

萬里相携遊、兩友一詩婦、上車如
在家、對坐把筆賦、路入東蒙
沙連天、風捲黃埃暗于霧、晚
來忽望土城明、落日照出洮南
府、

古澤先生大政

寛伏乞

与謝野鉄幹と漢詩

二③ 洮南客舍示同宿森立名君

洮南蒙古境、行旅太艱苦、驕卒漫
遮路、猛狗吠向人、天陰朝尚夕、草短
夏猶春、鹵土難生樹、沙塵欲沮輪、
磧中忽聽銃、車上屢驚神、枯木
存胡迹、新城多漢民、蠻膠催醉甚、
羌笛引愁頻、適遇同鄉客、唱和
姑相親、森君善國風、末句故及、

博古澤先生一粲併乞

高批 寛 未定稿

三④ 遊吉林

三千年舊國、肅慎迹
猶雄、萬筏大江上、

重城春樹中、山無亂

山狀、人有古人風、路

遇寛 袍女、華鈿插

髻紅、

寛

未定稿

謹乞

古澤先生大斧

四⑤ 奉天北陵

驅車北陵路、風日不堪埃、石獸
沙中立、野鴉牆上來、龍樓出
古樹、鳳瓦半青苔、回首興亡事、
帝業安在哉、固是肅慎裔、父
子勇兼德、滿洲八旗兵、萬里

与謝野鉄幹と漢詩

到于北、一舉制天下、天下皆胡

服、爾來三百歲、寶統今既空、

寂寞大王墓、只帶殘霞紅、

博古澤先生一粲併乞

大政

寬

未定稿

次に一、四の漢詩稿の書き下し文及び別の諸資料との詩句その他の文字の異同を記しておく。

一① 宿千山大安寺 用朱子月下述懷韻^① 下↓夜(1)(3)(4)

千山の大安寺に宿し、朱子の月下に懷いを述ぶの韻を用う

清徹上峰氣 清徹なり 上峰の氣

不許客衣單^② 許さず 客衣の単えなるを

童子晚吹火 童子 晩に火を吹き

煙颺松樹間^③ 煙は颺る 松樹の間

自笑平生語 自ら笑う 平生の語

漫然誇素寒^④ 漫然として素寒を誇る

願求詩骨瘦 願わくは詩骨の瘦せるを求めて ↓俟(1)(3)

飲水住千山^⑤ 水を飲んで千山に住まんことを ↓抱卷(1)(3)(4)

② 赴洮南車上作

洮南に赴く車上の作

萬里相携遊 萬里 相携えて遊ぶ

兩友一詩婦 兩友 一詩婦

上車如在家 車に上ること 家に在るが如く

對坐把筆賦 對坐して 筆を把りて賦す ↓毫(1)(3)

路入東蒙沙連天 路は東蒙に入つて 沙 天に連なり

風捲黃埃暗于霧 風は黃埃を捲きて 霧よりも暗し

二③ 洮南客舍示同宿森立名君

洮南の客舍にて同宿の森立名君に示す(詩題は異なる(1)(3))

洮南蒙古境 洮南は蒙古の境

行旅太艱辛 行旅 太だ艱辛

驕卒漫遮路 驕卒漫りに路を遮り

猛狗吠向人 猛狗 人に向かいて吠ゆ

天陰朝尚夕 天は陰り 朝尚お夕べの如く ↓墟荒今憶昔(1)(3)

草短夏猶春 草は短くして 夏猶お春のごとし

鹵土難生樹 鹵土 樹生じ難く ↓霜白朔邊土(1)(3)

沙塵欲沮輪 沙塵 輪を沮まんと欲す ↓風黃沙漠塵(1)(3)

磧中忽聽銃 磧中 忽ち銃を聴き ↓欲廻輪(1)(3)

車上屢驚神 車上 屢しば神を驚かす ↓朽(1)(3) ↓祀(1)(3)

枯木存胡迹 枯木 胡迹を存し

新域多漢民 新域 漢民多し

蠻膠催醉甚 蠻膠 酔いを催すこと甚だしく ↓翟膠(1)(3)

羌笛引愁頻 羌笛 愁いを引くこと頻りなり

適遇同鄉客 適たま同郷の客に遇い ↓喜(1)(3)

唱和姑相親 唱和して姑く相親しむ ↓酬相與(1)(3)

森君は國風を善くす、末句故に及ぶ、

博古澤先生一粲併乞高批

古澤先生に一粲を博し、併せて高批を乞う

寛 未定稿

三④ 遊吉林

吉林に遊ぶ

遊→×(1)

三千年舊國

三千年の旧國

肅慎迹猶雄

肅慎 迹猶お雄なり

萬筏大江上

万筏 大江の上

重城春樹中

重城 春樹の中

山無亂山狀

山は乱山の状無く

人有古人風

人は古人の風有り

路遇寬袍女

路に遇う 寬袍の女

華鈿插髻紅

華鈿 髻に挿んで紅なり

寛 未定稿

四⑤

謹乞古澤先生大斧

謹んで古澤先生の大斧を乞う

奉天北陵

奉天の北陵

驅車北陵路

車を驅る 北陵の路

風日不堪埃

風日 埃に堪えず

石獸沙中立

石獸 沙中に立ち

野鴉牆上來

野鴉 牆上に來たる

龍樓出古樹

龍樓 古樹より出で

鳳瓦半青苔

鳳瓦 半ばは青苔

回首興亡事

首を回す 興亡の事

帝業安在哉

帝業 安くに在らんや

固是肅慎裔

固より是れ肅慎の裔

父子勇兼德

父子 勇にして德を兼ね

滿洲八旗兵

滿州 八旗の兵

萬里到于北

万里北に到る

一舉制天下

一挙に天下を制し

与謝野鉄幹と漢詩

爾來三百歲 爾來 三百歲

寶統今既空 寶統 今既に空し

寂寞大王墓 寂寞たり 大王の墓

只帶殘霞紅 只だ殘霞の紅を帶ぶ

博古澤先生一粲併乞大政

古澤先生に一粲を博し、併せて大政を乞う

寛未定稿

右に挙げた五首の漢詩が詠まれた場所、詩型、日時（昭和三年1928）を記しておく、

一①遼寧省鞍山市・千山大安寺 五言古詩 五月一八日

二②吉林省洮南市 洮南への車上 雜言体 五月二五日

三③吉林省洮南市 洮南の客舎 五言排律 五月二五日

四④吉林省洮南市 吉林 五言律詩 六月一日

五⑤遼寧省瀋陽市 奉天北陵（昭陵） 五言古詩 六月七日

次に一〜五までの漢詩について簡単に解説をしておく。

一①は、遼寧省の有名な景勝地千山にある古刹大安寺での作、の第二首、南宋の大儒朱子の「月夜述懷の詩」の韻を用いて作られた詩である。詩を作る氣力が衰えたところに書物を携えてこの千山で住みたいものだ、と千山の大安寺への親愛の情を詠じている。

二②は、吉林省の洮南から東蒙古へ向かう旅の車中である。加藤・佐藤の両氏、晶子、一行四人が車中で作詩をしながらの旅、次第に周囲の風土環境が変化していくさまをうたう。詩型・また詩句の文字の異同が多い詩である。

三は、一②と同じ洮南の地で日本人の経営する旅館に宿泊した夜、排日感情のさかんな地で部屋に閉じこもり、森立名と知り合い共に和歌を作り合ったことを詠じている。

四は、吉林省での作、昔の肅慎国、滿州の旧國の風情、街の女性の旧風俗衣裝を詠じている。

四は、遼寧省の旧奉天（現瀋陽）で、清の太祖を祀った北陵（昭陵）で三百年続いた清王朝の興亡の歴史に思いをはせ、陵墓の前での感慨を詠じている。

この五首の漢詩を収録する諸資料を次に挙げる。(0)及び(3)が新資料であり、(5)は書翰である。

(0)古澤家蔵

四枚・五首

(1)「滿蒙遊草」

三七首

(2)「滿蒙遊記」

一首

(3)与謝野光氏蔵（現堺市博物館蔵）

三七首

(4)堺市博物館蔵（旧森藤子氏蔵）

一枚・二首

(5)書翰…寛の古澤幸吉宛書翰

次に各漢詩稿を載せる諸資料を記しておく。

一① (1)・(3)・(4)・(5)書簡（八月一七日付）

二② (1)・(2)・(3)・(4)・(5)書簡（八月一九日付）

三③ (1)・(3)

三④ (1)・(3)

四⑤ (1)・(3)

先にもすでに述べたように、寛から古澤氏に宛てた書翰の内容から、これら四枚、五首の詩はいずれかの書翰に同封されたものであるが、書翰に同封された漢詩が当時のままの状態で保管されていたものであれば、これまでに生じた種々の問題点を難なく処理できたであろうが現在では推定の域を出ないのが惜しまれる。

先に挙げた(5)書翰、昭和三年(1928)八月一七日付、に「別紙一篇貴閥を乞ひ申候。猶おひおひに御覽を願ひ可申候。ハルビンにての長詩、猶数句にてまとまり申さず候。…」とある文面から「一①②」を同封していたかと思われる。一①②は、二篇なので「別紙一篇」は符号しないが、他の詩篇との順序から推してこの一枚を指すと推定してよいだろう。(5)書翰、同年八月一九日付、に「…滿蒙の詩稿を整理致

候こと捗らず、(略)こゝにまた少々御覽に供へ申候」とある文面から「二③」「四⑤」が同封されていたのではないだろうか。

先に挙げた(1)～(5)までの五種の諸資料の中で、(1)と(3)は同じ系統である。(3)は(1)の出版前に、寛の漢詩の師であった吉田学軒の添削・校閲を経た最終原稿である。添削・校閲の跡はかなり厳密詳細で、学軒も細心の注意をはらって苦心したことが朱筆の跡からうかがうことができる。ただし学軒の最終の添削の定稿が何れなのか正確に判読するのが困難な箇所も多々あり、なお今後も精査を必要とする。出版された「滿蒙詠草」は学軒の添削修正に必ずしも寛は忠実に従っていないところもある。

もう一つの新出資料(0)は先に挙げた四枚のみであるが、(4)の堺市博物館蔵の一枚と共通点がある(4)の「滿蒙遊草」の漢詩稿はこの一枚のみ)。一①は、第七句の「願求」が共通であり、第八句は、(4)は原案の「飲水」を修正して「抱卷」としている。その料紙(ケント紙?)と寛自身の修正加筆の跡の多さから、(4)は作詩当初に近いものではないかと筆者は考えている。

なお、一に関して(0)と(4)の両者には相違点もある。先ず詩の順序が異なっており、(4)は「二②、一①」で(0)とは逆である。次に、(4)には寛自身の修正加筆が多々ある。特に二②の詩は五六句の「路人東蒙沙返天、風捲黃埃暗于霧」の二句が欄外の加筆であり、また第五句の「東蒙」の原案は「蒙古」である。また第七句の「晚來望土城明」の原案は「沙上望土城高」、第八句の「落日照出洮南府」の原案は「一路既入洮南府」から「落日照出洮南府」へ、最終的には「夕陽照出洮南府」と修正している。また(4)は詩の題が「赴洮南車上作」ではなく「東蒙雜詩之一」が定稿で未修正のままである。なおこの詩の題を「東蒙雜詩雜誌之一」とするのは(4)のみである。

以上挙げたことから、一②の詩は、最初に(4)の「東蒙雜詩之一」の題で作詩され、詩一首は寛の数回の字句の加筆修正を経て、(0)の古澤

本の詩型になったのであろう。②の定稿は、(1)・(3)の冒頭が五言六句であり、(0)・(2)・(4)の冒頭が五言四句、また詩句の字がかなり異なっている。(1)・(3)は「左提一詩婦、右挈兩詩友、四人遊萬里、古孰得似否、上車如在家、對坐把毫賦」の五言六句で、また(3)は「城」の字に自注がある。(0)・(2)・(4)は「萬里相携遊、兩友一詩婦、上車如在家、對坐把毫賦」の五言四句である。

また「滿蒙遊記」の旅行記の中で晶子は寛がこの詩を詠んだことを唯一記しているので(②)、現地での詩はこの詩が原詩であり、(3)を経て最終稿の(1)へと定着したのであろう。②の詩は、(0)・(2)・(4)が原詩で、(3)・(1)が定稿と推定される。このようにして、②の詩は複雑な経過をたどり、最終的に(1)の「滿蒙遊草」の詩型となったのであろう。

○

「滿蒙遊草」に関して、二つの新しい資料が出現したので、本稿ではその紹介と「滿蒙遊草」の漢詩稿の完成、刊行に至る経過について新しい発見があったように思う。寛の漢詩人としての意識、また執筆を如実に示すものがあり、短歌制作との間で精神が常に揺れ動いていた創作活動の姿勢を感じ取ることができるのではないだろうか。

〔注〕

注(1) 「与謝野鉄幹と漢詩―『滿蒙遊記』付『滿蒙遊草』の漢詩―」(一)― 東海学園 言語・文学・文化 第十二号(通巻第七一号) 平成二十五年三月発行

注(2) 『古澤幸吉自叙伝「吾家の記録」―村上・厚岸・東京・ハルビン―』編者古澤陽子 印刷・製本 光写真印刷株式会社 二〇一六年五月二五日発行

注(3) 与謝野光家蔵(現堺市博物館蔵)は「滿蒙遊草」以外に寛の漢詩を収録する。

注(4) 「吾家の記録」四一九頁

与謝野鉄幹と漢詩

注(5) 「未定稿」の文字が無い。

注(6) 注(1)参照。

注(7) 注(1)一三頁―一四頁。

注(8) 注(1)一六頁―一七頁。

注(9) 「滿蒙遊草」の番号。注(1)参照。

注(10) 月夜述懷 朱熹

月夜懷いを述ぶ 朱熹(朱文公文集、卷二)

皓月出林表 皓月 林表より出で

照此秋牀單◎ 此の秋牀の單を照らす

幽人起晤歎 幽人 起きて晤歎す

桂香發窓間◎ 桂香 窓間に発す

高梧滴露鳴 高梧に滴露鳴り

散髮天風寒◎ 散髮 天風寒し

抗志絶塵氛 抗志 絶塵の氛

何不棲空山◎ 何ぞ空山に棲まざるや

※五言古詩。韻は上平の一四・寒、上平の一五・刪、上平の一四・寒、上平の一五・刪。(寒・刪は通押)。次韻の詩。

注(11) 哈爾濱にての長詩 哈爾濱での寛の詩は不明。「滿蒙遊草」には見えない。

※「滿蒙遊草」に、寛が古澤幸吉に贈った漢詩一首が見える。

哈爾賓客中、呈古澤幸吉先生

哈爾賓の客中に、古澤幸吉先生に呈す

先生白髮未云還 先生 白髮なるも 未だ還らずと云う

留住朔方沙漠間 朔方沙漠の間に留住し

卓落東邦千載策 卓落す 東邦 千載の策

蒼茫黑水兩厓山 蒼茫たり 黑水 兩厓の山

古沢家の新資料は、平成三一年二月二〇―三月二四日まで「さかい利晶の杜」(堺市)で展示されたものである。